

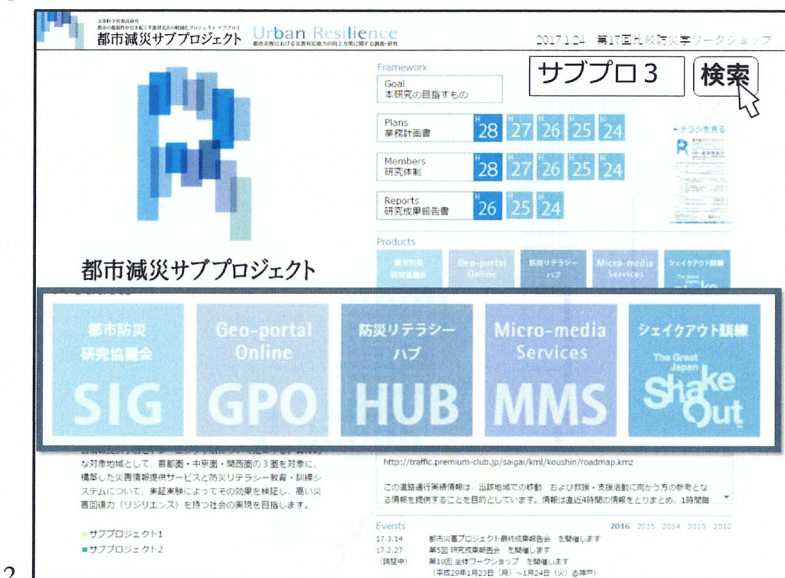
「防災リテラシーハブの開発」

木村 玲欧 (兵庫県立大学環境人間学部 准教授)

私は、心理学、社会調査が専門で、さまざまな被災地の復興調査や、実際に学校や授業で子どもたちの能力を上げるような授業のプログラム開発や子どもたちの能力向上の測定などを行っています。

そんな私は、都市減災サブプロジェクトを担当することになりました。昨日も林先生の基調講演で紹介されたとおり、図表1のようなホームページがあって、その中にプロジェクトで取り組むべきことを最初に五つ明示しています(図表2)。私は、その中の「防災リテラシーハブ」の担当です。

正直申しますと、林先生から「防災リテラシーハブをやるぞ」と言われて、私自身が、防災リテラシーとは何かよく分からず、何から始めればいいのか分からないところから5年間のプロジェクトが始まりました。今日は、防災リテラシーハブを5年間かけて作って

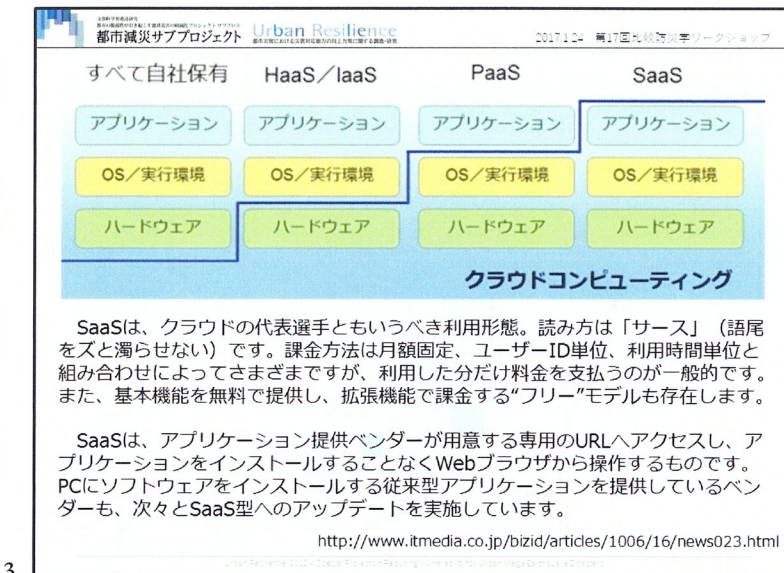


きた成果について、いろいろと紹介させていただきたいと思います。

1. 防災リテラシーハブ

図表3には、SaaS や PaaS など、情報分野の専門用語が並んでいます。私は専門外なのですが、これらが最新の考え方ということです。例えばパソコンを使う時に、私はパソコンのソフトを買って、そのソフトをインストールして仕事をするのですが、今までのパソコンを使った仕事のあり方でしたが、最近は皆さんも地図を Google で動かしたり、Yahoo!で動かしたり、インターネット上にメールソフトが既にあるとあって、メールでやりとりしたりしています。ネット上にアプリケーションも含めて全て置かれていて、それを操作することでいろいろな使い方ができるわけです。防災リテラシーハブの目的はインターネット上で動かすことができる SaaS を作ることにあります。

インターネットで「防災リテラシーハブ」と検索すると、検索ソフトや使用履歴によって前後しますが、大抵は一番上に載っています（図表4）。これをクリックすると、トップ



3



4

画面が出てきて、検索の画面があつていろいろなものが載っています。画面を一番下までスクロールして「もっと見る」を押すと、さらに出てきます。今、画面上で操作をしていますが、例えば、河内長野市の防災対策が書いてあったり、枚方寝屋川消防組合のホームページが載っていたりします。この枚方寝屋川消防組合のタイルをクリックすると、このページの紹介を見ることができたり、実際にそのページに飛ぶことができたりする仕組みです。

現在、3212件の投稿があります。いろいろ検索することもできます。例えば私は、都市脆弱性プロジェクトのメンバーなので、あえて難しい単語である「脆弱性」で検索すると7件ヒットしました。例えば都市減災サブプロジェクトのホームページも見られますし、東日本大震災女性支援ネットワークにもヒットしています。脆弱性の高い人々、特に女性の権利が満たされる環境づくりを目的としてこのような団体があるようです。ここを開くと、女性の多様なニーズに配慮した災害支援事例集というネットワークのPDFを見ることができます。

他には「クローズアップ現代」のホームページが載っていますね。ここをクリックすると、河田先生が出演された2005年9月27日の回が偶然ヒットしましたが、このように「クローズアップ現代」の放送内容をまとめたページや、他には、兵庫行動枠組のページ、この中に脆弱性という言葉がキーワードの一つになっていたのが調べることができます。

このように「脆弱性」というキーワード一つをとってもいろいろ出てきます。ここは神戸なので、例えば「阪神 震災」と検索すると、「阪神」と「震災」という二つの言葉の検索結果が出てきます。178件がヒットして、中林先生の「事前復興からのアプローチ」のホームページが出てくるなどいろいろあります。これもスクロールして雰囲気を見ることができます。

私は、一般の講演などでも防災リテラシーハブのページを紹介するのですが、お知り合いになった方には、後日、「どんなキーワードを検索したか」を聞くことがあります。すると、意外と「家庭」と検索する方がいます。「家庭」で検索すると92件ヒットします。このオレンジのタイルは、クイズです。防災リテラシーハブには、クイズを作る、載せる機能もあって、クリックすると「家庭でできる備えについて学ぼう」ということで、クイズに答えることもできます。

また別のキーワード「避難」と入れると、結構たくさん出てくるはずですが、1384件ヒットして、最近では例えば内閣府の避難マニュアルなどもあります。「内閣府」で検索すると99件ヒットし、神奈川県や日本商工会議所、内閣府などさまざまなものが出てきます。避難所の運営であれば、「運営」と入れると8件がヒットします。内閣府のガイドラインももちろん見ることができます。

そのような形で、いろいろな防災の知をネットから見ることができるハブを作成しました。皆さんも「防災リテラシーハブ」と入れれば、ご覧いただけます。5分でも10分でも結構ですので、よろしければ暇なときに見ていただきたいと思います。もちろんスマートフォンでも見られるので、「防災リテラシーハブ」で検索していただきたいと思います。アカウントを登録してログインすると、メニューが少し複雑になって、自分でいろいろなことを投稿することもでき、それが反映される仕組みも作ったので、後で少し詳しく紹介したいと思います。今ではこのようにシステムができて、ログインできますので、自分でも

投稿したい方は私に連絡していただければ、アカウントを発行します（図表5）。

2. 防災・減災に関する資料の収集

この話を頂いた時点で、私はすでに一つの疑問を持っていました。私は防災について地域住民の方とのお付き合いが多いのですが、講演や住民向けのワークショップなどに参加すると、「防災・減災に関する資料が全く分からないので、いい資料があったら教えてほしい」という問い合わせが結構あります（図表6）。そもそも何を調べれば防災・減災の活動につながるのか分からなくて、調べようとしてもキーワードに何を入れて検索したらいいかよく分からないと言われます。「自分の知りたいことを入れればいい。普通のインターネットの検索と同じ」と言うと、「あなたは防災の専門家だから何を入れればいいか分かるけど、普通に生活している自分たちからすると、何かキーワードっぽいことを入れて調べても、断片的な資料しかなくて、体系的にまとまっているものがそもそもない」と言われます。この話を最初に聞いたとき、私は驚きましたが、よく話を聞くと、例えばネットで

5

都市減災サブプロジェクト Urban Resilience 2017.1.24 第17回九州府県庁舎ワークショップ

木村玲欧
(兵庫県立大学)
rkimura@shse.u-hyogo.ac.jp

木村玲欧 検索

木村HP > 連絡先

6

「防災」「減災」に関する資料を収集する

- そもそも何を調べれば「防災」「減災」につながるのかがわからない
- 「キーワード」に何を入れて検索すればよいのかわからない
- なんとか調べても断片的な資料しかなく、体系的にまとまっているようなものが見つからない
- 「防災訓練」「防災教育」と入力しても、自分が探そうとしている資料になかなか行き当たらない

「防災教育」「防災訓練」で検索してみても、本当に体系的にまとまったページがすぐに出てこないのです。

今はその頃から少なくとも5年以上たっていますが、例えばネットで「防災訓練」と入れたら、防災訓練のまとまった体系的なホームページが出てくるかというと、残念ながら出てきません。今、検索した結果を見てもらっています。パソコンの検索履歴も反映されるので、私の場合はどうしても兵庫や神戸のコンテンツが先に出てきますが、兵庫県や神戸市の訓練の話、ウィキペディアの防災訓練の項目、何かの連載ページの最後などがヒットします(図表7)。このように個別の防災訓練はヒットしますが、そもそも防災訓練とはどういうもので、どのような種類があって、実際何が行われているのか、ネットだけで調べることは難しいという現状がありました。

例えば、検索ワードを代えて「防災教育」で調べてみても、広告的なものがあり、その下が内閣府のもので、「内閣府も防災教育の特集ページをようやく作ってくれたのか」と思ってクリックすると、平成21年度の広報「ぼうさい」のページでした。この後に東日本大震災があるので、時代はだいぶ変わっています。ネット上に出てくるからといって、今の防災教育とはいえないのです。後は、林先生や私が関わらせてもらっている防災教育チャレンジプランのホームページもありますし、目黒先生も関わっている防災教育普及協会のホームページもありますが、例えば一般の人が防災教育について調べようとして、ネットですぐに情報にアクセスできるかというと、やはり難しいです。防災に関する情報については、まだまだ格差が存在しているのではないかという問題意識が、私の根底にありました。

3. 防災知・減災知の集約・発信

そこで、このプロジェクトを通して、分散する防災知・減災知を集約・発信することを



7

考えました（図表8）。防災知や減災知は、専門家の人間からすると、自分なりにまとめたり、どこかで話したり、発信したりするものです。インターネットという巨大な海の中で、一般の人が海図もアンカーもないまま検索していても、ヒットしないのです。ですので、専門家の人間から手を伸ばすような仕組みが何か必要ではないかという思いが、防災リテラシーハブの目的の一つとしてありました（図表9）。

昨日の林先生の基調講演にもあったとおり、発災後さまざまな対応をするとき、専門家がいちいち被災地に満遍なく行くわけにもいかないのが、発災後もリテラシーハブにすぐ投稿したりアクセスしたりできる仕組みを作らなければなりません。そこで、GK 京都というデザイン会社さん、アールツー・メディアソリューションというシステム会社さんと一緒に、防災リテラシーハブという仕組みを作りました。

平常時や発災後に、災害対応従事者も一般市民も見ることができるようなさまざまな利

8

Urban Resilience 都市減災サブプロジェクト

分散する「防災知・減災知」を どのように集約・発信するか

- 【平常時】防災・減災の知は多様な学問分野・主体が関係しており、相互理解・交流が不足している
 - 「言葉」が異なる（専門用語、理論枠組、方法論）
 - 「実践防災」の行政・市民の知を収集できていない
- 【発災後】災害対応の知・技術を、迅速・的確に伝えていくことが難しい
 - 「組織内」に災害対応の専門家がいない。平時の災害・防災担当部署以外も災害対応に従事する必要がある
 - 「組織外」に災害対応の専門家が少ない。時間・距離の制約がある。

9

Urban Resilience 都市減災サブプロジェクト

都市減災サブプロジェクト

Goal: 本研究の目指すもの

- 大規模な被害発生が予想される首都直下地震及び、南海トラフ地震による被害を最小にとどめ、高い災害回復力を持つ都市の実現を目指す。
- ICT分野での新しい要素技術を活用して、円滑な応急・復旧対応を支援する災害情報を提供するための2つのシステムで構成されるしくみを開発する。
 - 第1は、関係者間の状況認識統一を可能にするクラウドを活用したG空間情報処理システム。
 - 第2は、社会全体に対してキメの細かい災害情報を提供できるマイクロメディアサービス体制の開発。
- 災害対応に対する国際基準に準拠した研究・訓練体系の構築と、個人や家庭、各組織における事業継続能力を高めるための科学的研究成果に基づく学際統合的な啓発手法とコンテンツの整備を行い、**防災リテラシーの向上**を模索し、自助・互助・共助・公助力を高める。
- その前提として、東日本大震災で現在進行中の応急対応・復旧復興に関する災害経験とこれまでの被災経験を比較して、防災力向上に寄与する知見・教訓を導く。

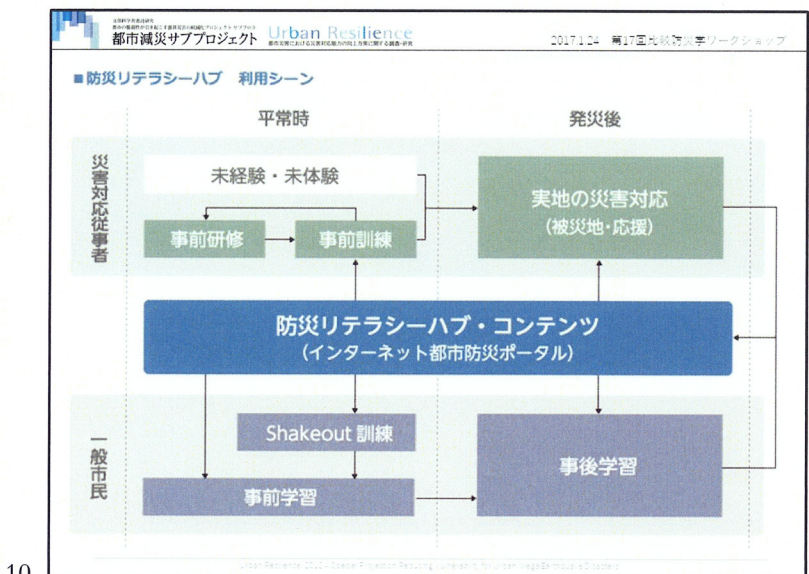
用シーンを想定しながら作りました（図表10）。

リテラシーという言葉がまだよく分からないという方もいらっしゃると思いますが、リテラシーとは読み書き能力のことです（図表11）。国連の報告書などでリテラシーといえば識字率、いわゆる読み書きできる能力の割合として使われています。転じて最近では、コンピュータを使う能力のある人を「コンピューターリテラシーがある」と表現します。そのようにさまざまなものを使いこなせる能力をリテラシーといいます。

リテラシーに「ハブ」が付いて、少し複雑な感じになっていますが、「ハブ」とは車輪の中心部のことです。航空業界では、いろいろな航路の結節点になっている空港を「ハブ空港」といいますが、さまざまな防災リテラシーの結節点となり得る仕組みを提案するのが防災リテラシーハブの内容でもあり、目的でもあります。

4. 防災リテラシーハブの特徴

防災リテラシーハブはこれまでの比較防災学ワークショップの中でも紹介しているので



10

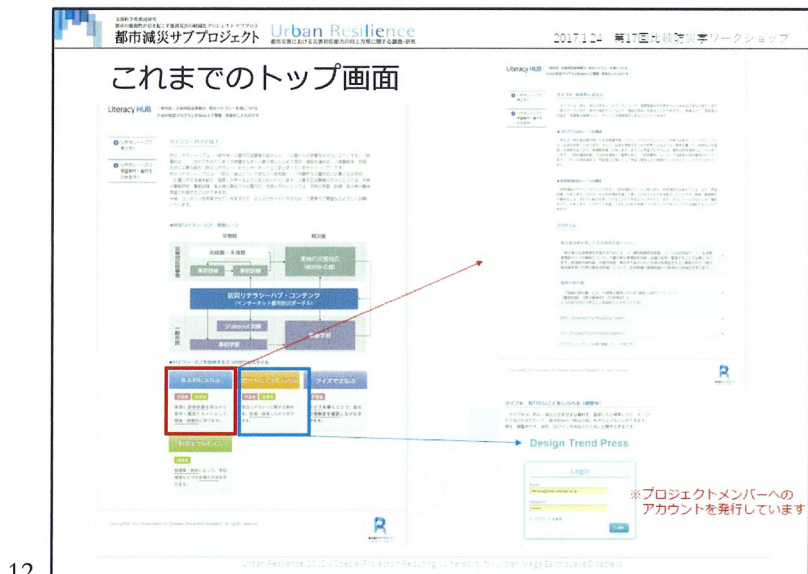
「防災リテラシー」「ハブ」の必要性

- リテラシー（デジタル大辞泉）
 - 1 読み書き能力。また、与えられた材料から必要な情報を引き出し、活用する能力。応用力。
 - 2 コンピューターについての知識および利用能力。→コンピューターリテラシー
 - 3 情報機器を利用して、膨大な情報の中から必要な情報を抜き出し、活用する能力。→情報リテラシー
- ハブ（デジタル大辞泉）
 - 1 車輪の中心部。また、自動車の車輪を取り付ける部分の円板や、航空機用エンジンのプロペラを取り付ける金具。
 - 2 中心。中核。
 - 3 コンピューターシステムで、複数の端末を集めて連結する中継器。LANなどを組むのに使われ、減衰した電気信号を復元する機能などをもつ。集線装置。
- 防災リテラシー（一般市民・被災者および災害対応従事者が身につけるべき防災力）向上のために必要となる知識・技術・態度を体系的に提示する基盤として「防災リテラシーハブ」と名付ける研修・訓練の仕組みをWeb上に開設する。

11

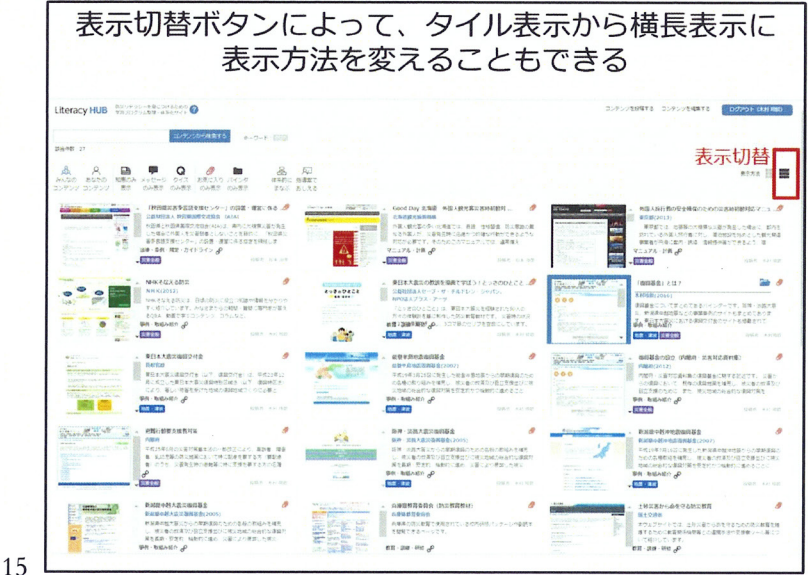
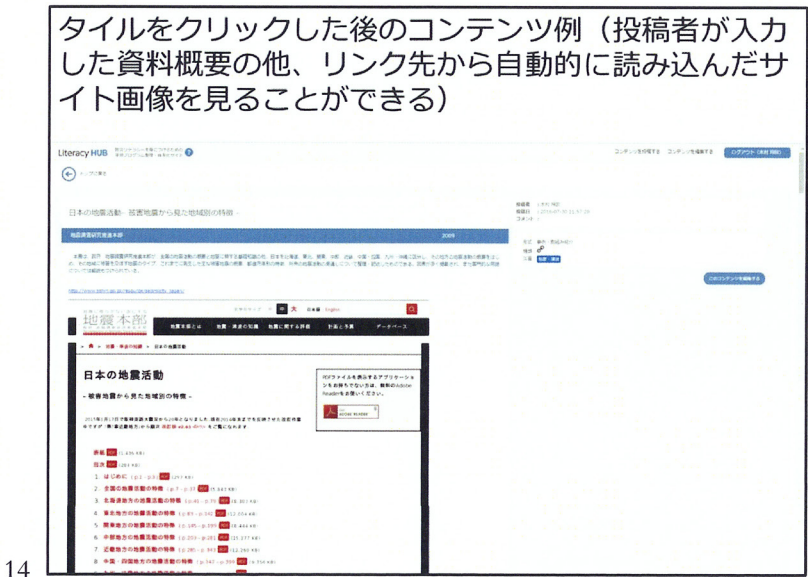
すが、ユーザーの皆さんの利用実態をもとに何回も改良を重ねてきました（図表12）。これまでのトップ画面では説明を最初に載せて、そこからまず自分の利用シーンを何パターンか選びます。そうするとページが開いたり、ログイン場面が出てきたりする形で、一般のホームページとあまり変わりません。しかも、自分が利用したいボタンはどれかを選ばなければならないので、少し取っつきにくかったのですが、ユーザーからご意見を頂いて、先ほどご覧いただいたような防災リテラシーハブのトップ画面に移行しました。

防災リテラシーハブのトップページにもう一度戻りたいと思います（図表13）。表示倍率



を大きくすれば、中をもう少し見ることができますし（図表14）、小さくすればいろいろなものを一覧することもできます。このように表示方法もうまく変えられるようにしています。最近、Windows でも Mac でも、同じ面積のタイルの中にいろいろな知恵を凝縮して表現するのが業界のはやりであることを後で知りました。今、ご覧いただいているのは縦長のタイルなのですが、日本語はこれでは見にくいと、横長にしてほしいというユーザーの意見を反映させて、切り替えボタンを押すと横長で見することもできます（図表15）。表示倍率を 100%に近い状態にすると、もう少しタイルが大きくなり横長で詳細な中身を見ることができます。

「みんなのコンテンツ」のボタンを押すと、3512 件全てのさまざまなコンテンツを見ることができます。「知恵のみ表示」を押すと、いろいろなホームページのリンクや PDF ファイルなどが見られます。ネットで検索するよりも、ここで「訓練」などと検索した方がもう少し絞り込めるかもしれません。例えば「訓練」「安否確認」で検索すると 150 件ほどあります。河田先生が 2014 年に NHK の「視点・論点」に出られたときのテキストも出て



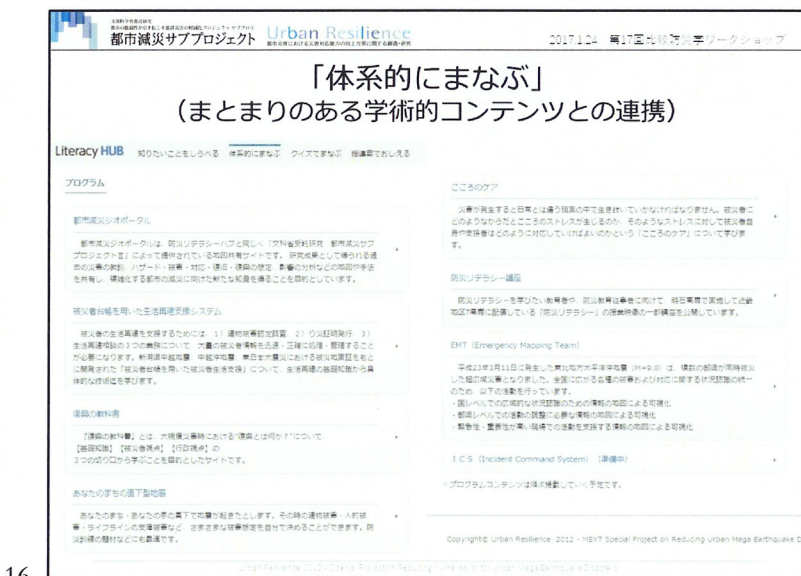
きました。それから泉南市や寝屋川市、文部科学省の「都道府県・政令市教育委員会作成資料一覧」という便利なページもあり、さまざまな学校の安全教育のページを見ることができます。他には、岐阜県の事業継続計画における安否確認訓練の話や、三田市国際交流協会の外国人向けの防災オリエンテーションの中の安否確認の話など、自分の興味に合わせて実際に見ることができます。「訓練」「安否確認」という二つの単語で検索しましたが、「訓練」だけを消したときは×を押すと「訓練」が消えて、「安否確認」だけで1036件がヒットします。

このように、いろいろな知恵をヒットさせることができます。例えばハザードを絞るために「水害」と入れると、例えば貝塚市防災ガイドブックの中に書いてある安否確認の水害訓練のものなど、さまざまなものを見ることができます。今日、私が発表したいことの大部分は、ここまでで申し上げました。「よろしければインターネットから防災リテラシーハブを開いて、防災の世界ではこんなことがまとまっているということをぜひご覧いただきたい」のです。

5. 防災リテラシーハブの活用

これだけでもいろいろな使い方ができると思っていますが、「体系的にまなぶ」「指導案でおしえる」という項目もあります。「みんなのコンテンツ」という投稿コンテンツの特設ページで「体系的にまなぶ」をクリックすると、少し変わった形のプログラムが出てきます（図表16）。これも最終的にタイル形にする計画ですが、「体系的にまなぶ」は都市減災のさまざまな研究の中で、体系的にまとめられているホームページ、いわゆる特設ページにリンクを張っています。例えば鈴木先生の都市ジオポータルは、非常に美しく作り込まれていて、しかも使いやすく良いページです。もちろん「あなたのまちの直下型地震」も特集ページから見ることができます。

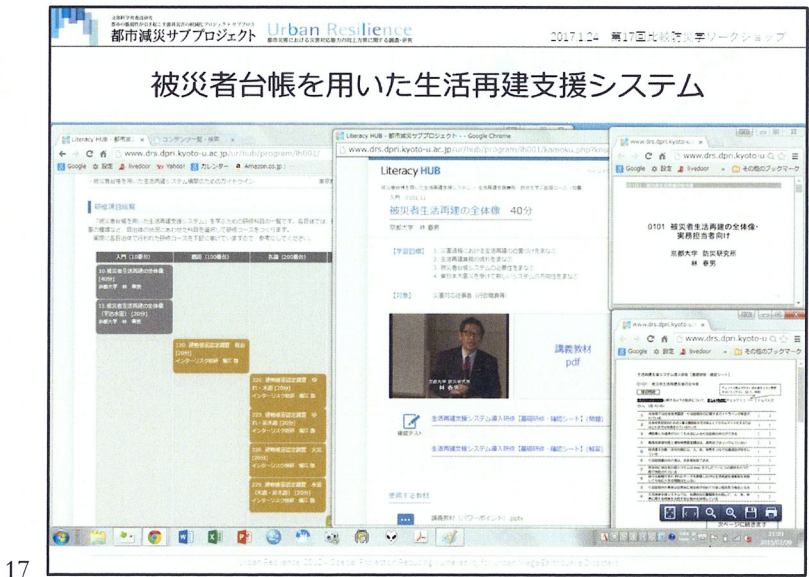
それから、例えば田村先生が中心となって取り組んでいる被災者台帳を用いた生活再建



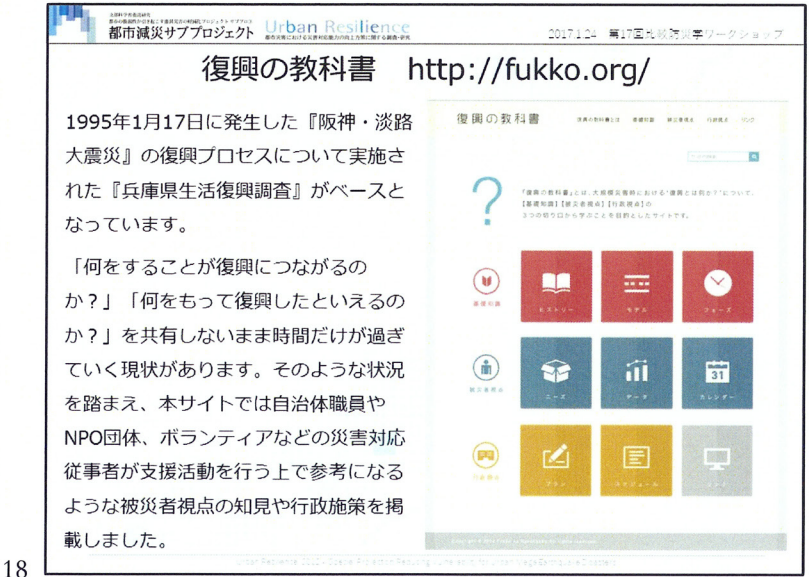
16

支援システム（図表17）などの学習サイトも見ることができます。これはまだ古いバージョンで、今も研究がどんどん進んでいますが、生活再建支援システムとは一体どういうもので、実際に被災地の人がどういうことを勉強すればいいかが分かります。例えば、専門家が行かなくても、現場で40分ほどの講義の動画を見て、全体像を理解して、その後でさまざまな各論の講義の動画を見ることで、生活再建について知識・技術がなかった行政職員に基本的な知識や振る舞いを持ってもらうような教育カリキュラムが載っています。例えば林先生が担当された講義の動画ファイルのページを開くと、林先生の講義を動画で見ながら実際にパワポのPDFも見ることができます。このように、プロジェクトの成果にリンクを張っているのが、「体系的にまなぶ」のページです。

例えば、別の例として「復興の教科書」というページがあります。このプロジェクトが始まる前から行われていた、阪神・淡路大震災で被災された方への復興調査の結果をまとめたものです（図表18）。このような「兵庫県生活復興調査」のさまざまな知識をまとめた特設ページも、このプロジェクトの中で作りました。



17

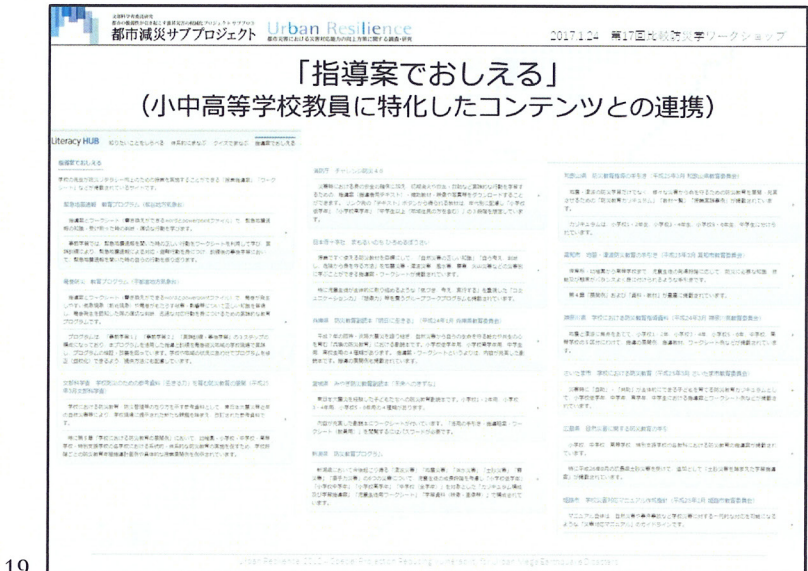


18

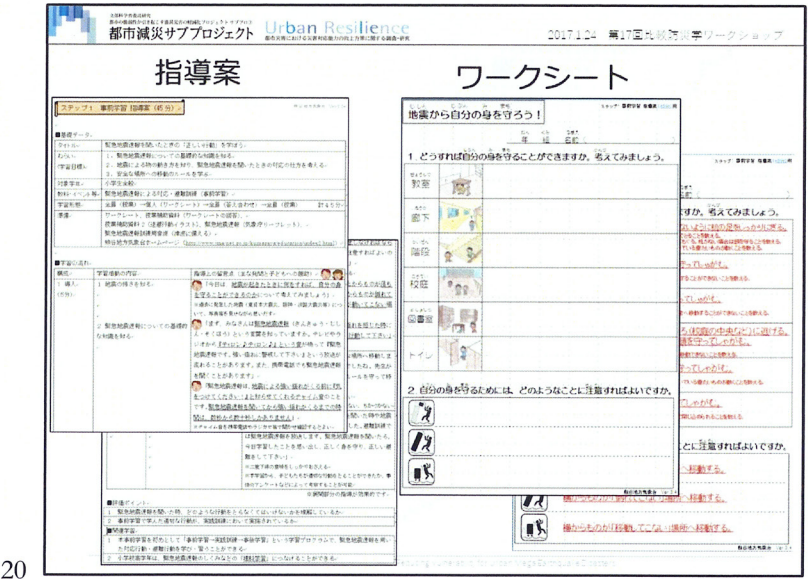
別の例です。明石工業高等専門学校の太田敏一先生が、近畿の高専との協働で立ち上げた「防災リテラシー講座」の講義映像です。私たちがサンプル映像を見ることができます。こちらについては著作権の関係などもあり、希望する方はさらに申し込みをすることになります。このように、本プロジェクトに関連した方々のいろいろな知恵を「体系的にまなぶ」に載せています。

「指導案でおしえる」というボタンもあります(図表19)。これは学校の先生向けに作ったものです。現在、防災教育は教員免許を取得する上で必修の授業ではありません。もちろん防災教育を専門にやられている先生もおられませんので、いざ「防災教育をやりたい」「いろいろな教育プログラムの見本がほしい」と思っても、どこにまとまっているのかが分かりません。そこで、「指導案でおしえる」ボタンから、さまざまな教育プログラムをリンクさせています。

教育プログラムといっても、ただ文書資料が掲載されているだけではなく、例えば熊谷地方気象台の教育プログラム(図表20)を見ると、教育の世界で「指導案」といわれる、



19



20

先生方が授業を展開するための「楽譜」のようなものや、児童生徒に配るためのワークシートをダウンロードできます。指導案やワークシートも Word ファイル、PowerPoint ファイルでダウンロードすることができ、先生方が自分で編集できるので、自分の学校や学年、子どもたちの状況に合わせて修正することができます。実はこのページ自体も、このプロジェクトの私の成果の一つですが、このような形のプログラムも紹介しています。

少しこの話を進めたいと思います。私たちが作成した教育プログラムは、現在、全国の小中高校の先生も参考にされていますが、指導案・ワークシートを実際に使って授業をしてもらっています。例えば指導案やワークシートは、学校関係者の方には見慣れた書式だと思うので、例えば教育歴 3 年ぐらいの先生は、ワークシート項目を黒板に張りながら授業をしています（図表21）。教育歴が増えると少し違って、3 年目ぐらいの方はただタイトルを張る感じですが、15 年目ぐらいの方はポイントの部分を自分で波型に切って、これが大切だということを強調して黒板に貼る工夫をしています。

理科の先生は、理科学習に発展できる内容にこの学習を追加しながら授業をしています。特別支援学校の先生は、図表を大きくプリントアウトして使っています。このように防災教育プログラムなどというマイナーなプログラムは、たいてい作った先生の手元に紙のまま置かれるだけで広がらずに終わってしまうこともあるのですが、全国のさまざまな先生方と共有できる仕組みを研究しながら作ってきました。

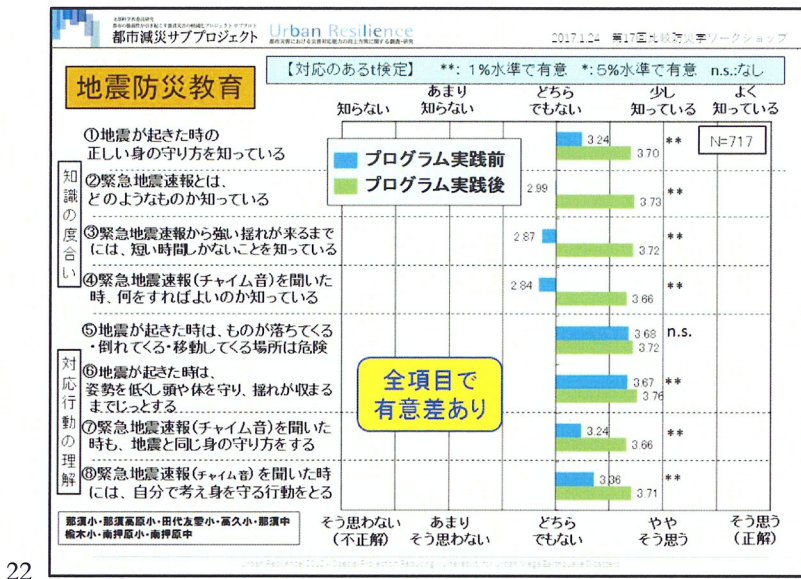
このプログラムを受けた児童生徒について、知識が増えたり、対応行動ができたという



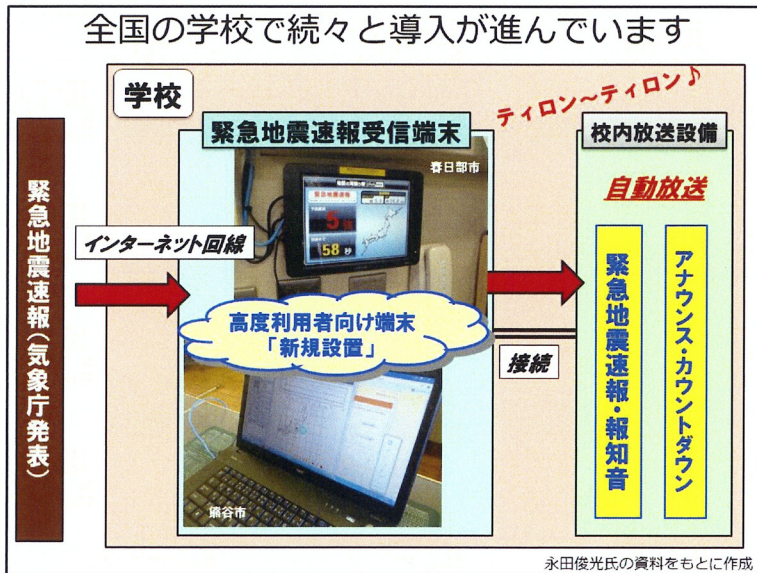
21

うような効果測定も併せて行っています（図表22）。

このような防災教育の動きは、今、全国で広がっています。今紹介したような防災教育は何も特殊なわけではなく、私たちが思っている以上に、防災をめぐる学校の動きは急速に進みつつあります。もちろん学校の教科書で、国語の時間に河田先生の文章を読みながら感想文を書く子どもたちも全国にいますし、全国の学校で続々と緊急地震速報の受信端末が設置されていて、授業中にいきなり緊急地震速報の音が鳴ります（図表23）。もし緊急地震速報の音が鳴ったときに、子どもたちに知識がなくぼーっとしていたら何の意味もありません。ということで、指導案にも入っているのですが、緊急地震速報の対応訓練も行われるようになりました。



22



23

ここで一つ、映像を見ていただきたいと思います（図表24）。小学校の緊急地震速報が鳴ったときの対応訓練の様子です。『ごんぎつね』を学習しているので、小学4年生、10歳ぐらいの子どもたちの教室です。当たり前ですが、抜き打ちです。子どもたちは訓練することを知りません。担任の先生は管理運営上、今日行われることは聞いていますが、具体的に何時に行われるかは知りません。「もし鳴ったら、担任として重要な任務である出入口を開ける行動はしてほしい」とだけ言われています。

実際、抜き打ち訓練のとき、今時の小学生はどんな行動をするのか、大混乱状態でとんでもないカオスな状態になってしまうのかという点も含めてご覧いただきたいと思います。

<映像>

映像はいかがでしたでしょうか。「地震です。落ち着いて机の下にもぐってください」というアナウンスのときには、身を守る行動が完成されています。これは優秀だと思います。例えば、今、この発表をしているここで「今からカウントダウンをするので、机の下に潜ってください」と私がお願いしても、なかなかここまでできないのではないかと思います。もちろん、子どもたちは無目的に机にもぐっているのではなく、授業をする中で、地震・緊急地震速報の意味を理解し、そして最初の段階は「自分の身は自分で守る」ということを分かった上で子どもたちは取り組んでいます。

これは2回目の抜き打ち訓練の様子ですが、大人だろうと子どもだろうと、きちんと理解して適切な行動ができるように訓練を積み重ねれば、子どもたちも2回目でこれぐらい力を発揮できます。そのような教育が求められているし、あとはわれわれがいかに発信していくかです。もちろん私たちが作っているプログラムが唯一正しいわけではなく、いろいろな教育の方法やスタイルがあっていいと思います。

今の防災教育はまだ、教育プログラムを作った先生の周りのごくわずかな範囲だけでしか共有してなくて、なかなか外に伝わっていません。そういう現状を打破して、全国の子どもたちに命を守るための知識と行動を取ってほしいという思いが根底にあります。

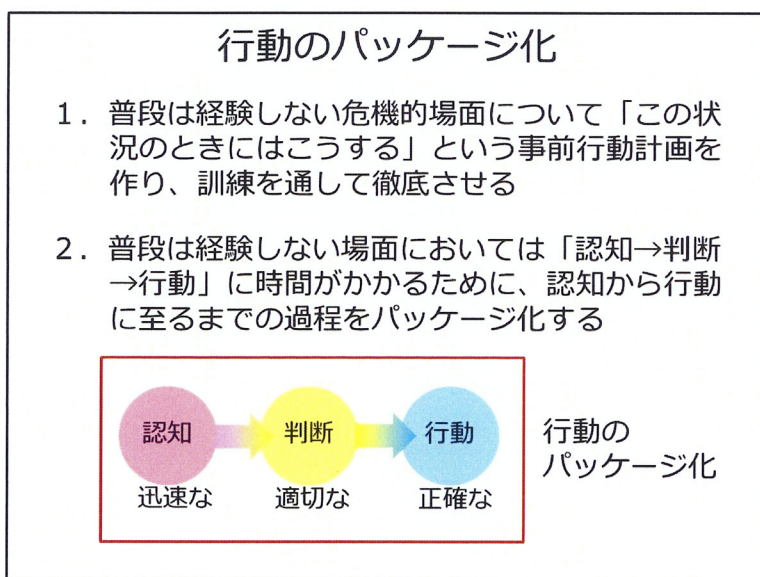


6. 行動のパッケージ化

「行動のパッケージ化」と銘打って、いろいろなことをしています（図表25）。人間は認知・判断・行動という3段階で実際に動きます。車の運転でも自転車の運転でも、赤信号だと認知したら、ブレーキをかけなければならないと判断して、ブレーキをかけます。例えば、車の運転がまったく不慣れな自動車教習所の生徒のようすをイメージしてください。赤信号が見えたときに、例えば赤信号の意味がよく分からなくて、停止線を越えてしまうと、すぐに検定中止になります。これは認知ができていても判断ができていない例です。例えば赤信号が「止まれ」だと分かっている「止まろう」と思っても、マニュアルの車でいきなりブレーキを踏むとエンストしてしまいます。これは判断ができていても上手な行動ができていない例です。

人間はいろいろな行動をしています。認知・判断・行動という複雑な仕組みで動いていることが多々あります。例えば緊急地震速報が実際に鳴ったとき、その音の意味は何か、みんなで20分ぐらい時間をかけて話し合ってから身を守っていたのでは間に合いません。ですから、いかに事前に正しい知識や振る舞いを知ってもらい、繰り返し学んでもらうことで、行動を一つのパッケージ化していくかということも、教育の問題と絡めて進めていっています。

さまざまな行動のパッケージ化が、教育・訓練現場を通して幾つも考えられています（図



25

表26)。地震の揺れを感じたときや緊急地震速報時に、自分の身を守る。揺れを感じたら津波のことを思い出して避難行動を取る。火災を発見したら、周知・通報・初期消火等を行う。倒れている人に一次救命処置を施し、必要に応じて AED を使用する。大雨警報が発表されたら何をすればいいのか。竜巻を見かけたら何をすればいいのか。

これらは、きちんと知っていて、何回かしっかりと経験していなければ、適切な行動に移すことはできません。このようなさまざまな行動のパッケージ化を型のように学んでいくことも、特に小学校の中学・高学年ぐらいの教育の中でしつけや振る舞いとして身に付ける必要があるのではないかと、思春期になる前に防災教育の要素としてしっかりと学んでいく必要があるのではないかとという声は、実際に現場の先生方からもよく聞かれます。

こんな型ばかり学んだからといって、本番の複雑な状況で何かできるのかと言う人もいますが、柔道や剣道、空手でも、型は応用に移すための基本です。もちろん行動のパッケージ化が全てではなく、あるとき練習したあの振る舞いがどんな状況でもパーフェクトに効くわけではありません。ところが、ある型を身に付けておくことで、たとえ本番の状況が違ったとしても、適切な判断や正確な行動に応用させることができます。そのようなことも今後の研究の視野に入れて、現場の先生方と始めているところです。

そうはいつでも、「やらない子」も出てきます。そのことを示そうと思って、中学校の訓

さまざまな行動のパッケージ化

- ・地震の揺れを感じた時／緊急地震速報時に、自分の身を守る
- ・地震の揺れを感じたら、津波のことを思い出して、（地震＝津波連想）避難行動をとる
- ・火災を発見したら、周知・通報・初期消火等を行う
- ・倒れている人に、一次救命処置をほどこし、必要に応じてAED(自動体外式除細動器)を使用する
- ・大雨警報が発表されたら、災害に備えるための対応行動をとる
- ・竜巻を見かけたら、自分の身の安全を守るための行動をする

26

練の写真をご覧ください(図表27)。写真の円の中の「子」は、しません。訓練の前に、「評価する人は他にるので、担任として必要なことをしてください」とお願いしましたが、見ていだけで何もしません。この人の頭の中だけは、地震が発生していません。訓練をすると、こういう人がたくさん出てきます。ただ、後で校長先生から「おまえだけ死んでいる」と言われ、とてもへこんでいてかわいそうでしたが、こんな形で「やらない子」も出てきます。

抜き打ちなので、廊下などでも行います(図表28)。ここでも、やらない「子」はいます。この先生もお願いしていないのに、自分からいきなり見回りを始めてしまっています。これは、何も学校の先生を非難しようという意図ではありません。問題は先生という職業ではないのです。現場で防災教育を見ていたり、地元の防災訓練を支援したりしていると、案外「大人」「高齢者」がしていないのです。

「何だかんだいって、今まで生きてきたのだから、そんなに簡単に死なない」というの



は、「連続性のワナ」だと考えています（図表29）。当たり前ですが、これまで生きてきたことと、この次の瞬間に自分が生きていることには何の因果関係もありません。ところが、人間は今までの自分の経験で未来を予測してしまいます。もちろん普段から経験していることについては、未来に起こったとしても上手に振る舞えると思いますが、災害についてもこのような非常に楽観的な連続性のワナに陥ってしまうことも、防災教育や訓練を通してわかってきました。

先ほどの写真だけですと、すべての学校の先生が悪いように誤解されるので、きちんとやっている学校の先生の例も挙げます。図表30は、教員室で学校の先生方がきちんと訓練をしている様子です。

それから、最近は抜き打ち訓練を授業参観日に合わせて行っている学校がとて多くな

「自分だけは死なない」という思い込み


「なんやかんや言われても、今までだって生きてきたのだから、そんなに簡単には死にはしない」

連続性のワナ

「これまで生きてきた」ことと、

「この次の瞬間も生きている」ことは、

ただの希望的観測で**何の因果関係もない！**



➡ 「わがこと意識」で生き抜く危機管理が必要！

29



30

訓練風景(教員室)

ってきました（図表31）。子どもたちと保護者が一緒に行くと、1回目の訓練のときは、保護者はぼーっと突っ立っていました。子どもたちに聞くと、「今日、うちのお母さんは死んでしまったので、とても悲しいと思いました」という感想が出ました。そうすると、親の心にぐっと刺さります。親は子どものためなら、防災だろうが何だろうがやってくれます。災害後に子どもたちを1人ぼっちにしないためには、自分たちがしっかりしなければならぬという「子ども発信」の防災教育の展開も考えながら、そのような思いも込めながら、防災リテラシーハブの機能を作ってきました。

今日は防災リテラシーハブを中心に話してきましたが、防災リテラシーハブには現在、3512件ぐらいが登録されています。ログインすると、もっと細かい機能がいろいろと使えます。さまざまな知恵の中から、「お気に入り」のマークを付けて、マークが付いたものだけを表示したり、必要に応じて入れ替えたりすることもできます。また、幾つもの「お気に入り」をバインダーにまとめることもできます。

防災リテラシーハブをぜひ一度触っていただき、もう少し細かな機能を触ってみたいという方は、ぜひご連絡いただければと思います。



訓練風景(保護者の授業参観日に行く)